明治維新の論理と構想

――木戸孝允を中心に――

五十嵐　暁　郎

はじめに

明治維新は近代日本史研究の焦点であり、これまでも多くの業績が集中していることは今さらいうまでもない。しかし、それにもかかわらず、この変革のリーダーとなった政治家の思想史的分析は、意外にとぼしかったようである。ことに、彼らの思想形成からその展開へ、すなわち幕末から維新国家形成までの思想史を一貫して捉えた研究はほとんど皆無というのが現状である。本研究は、トップリーダーの思想的展開という角度から明治維新を考察しようとするものである。(1)

本研究の中心的な対象に木戸孝允（一八三三～七七）をとりあげたのは、木戸が尊攘派志士、長州藩倒幕派、さらに維新政府というように、つねに明治維新史の中心的集団のリーダーとして活動した政治家であったことと、彼が政治家としてはきわめて豊かな思想的営為をおこない、明治国家体制の構想者として歴史的影響を残していること、しかも維新政権を掌握していった大久保利通（一八三〇～七八）の批判者として、彼とはことなる近代国家への路線を提起していることなどによる。木戸をとりまく久坂玄瑞（一八四〇～六四）、高杉晋作（一八三九～六七）、坂本龍馬（一八三

五～六七)、大久保らの思想は、木戸の思想展開と対照しながらおのおの位置づけ、全体として明治維新期における政治思想の潮流の方向を明らかにしようというのが、この論文のめざすところである。

ところで、木戸孝允にたいして今日われわれの抱いているイメージは、まず幕末の京都を舞台に活躍する若き日の木戸、すなわち尊攘派「志士」桂小五郎の華々しい姿であり、のちに維新政府にあっては、「元勲」という栄光の座にありながら、同時に「開明的」印象をも与える政治家像である。後者については、つぎの木戸評もまた例外ではない。「兎に角、木戸公に実に感心するのは、その行政の手腕ではなく、政治的見識であります。国家の進運を洞察する明があり、しかもそれは高遠の理想ではなくて、坐して云ふべく、立って行ふべきものであります。……哲学的識者でなく、経世的識者であります。維新の三傑に就いて、偉人の字は南州先生に、有力なる政治家は甲東先生に、而して所謂西洋で云ふ、リベラル、ステーツマンの典型は松菊先生に見られるのであります。この人は実に立憲政治家の日本に於ける、第一の模範人物であります。(2)」徳富蘇峰による賞讃はほとんど手ばなしであるが、われわれは彼の主張する「政治的見識」に富んだ「リベラル、ステーツマン」という木戸孝允像が、今日大方の木戸にたいする評価と、ほぼ合致するものであることを認めうる。

たしかに、近代国家草創期のわが国にあって、未知の局面に対処すべく生み出され、同時に新たな国家体制の基礎となった五ヶ条誓文、廃藩置県のような、維新国家にとって画期的な諸施政や、あるいはまた立憲政体のような「リベラル」な構想の功労者に、まず木戸の名を挙げないわけにはいかない。かくして木戸はまた、明治国家体制の「構想者」の歴史的地位を与えられている。

木戸がその「政治的見識」を高く評価され、体制「構想者」の地位を獲得したことについては、二つの事実が想起される。一つは木戸自身の旺盛な知識欲と貪欲な情報蒐集である。蘭学系の藩侍医という、当時としては知的雰囲気

に恵まれた家庭で育った彼は、「外圧」に際しては、その脅威の背後にある西欧科学技術に関心をよせ、その習得に努力した。維新三傑中ただ一人外国語を解するようになったのも、このときの学習によるものである。さらに維新前後、ますますたかまる「内憂外患」は、彼をして内外の情勢に鋭い注意を払わせた。たとえば遠く普仏戦争の成行きについても、その結果が東洋に及ぼす影響への憂慮は、留学生らを通じての「近情収集」へと彼を駆りたてずには止まなかった。木戸のこの知識欲は、政治制度にたいしても例外ではなく、たとえばヨーロッパ諸国における憲法制度の沿革・現状を解説し、木戸の憲法構想作成に助言者として大きな役割をはたした青木周蔵をして、「木戸翁は、憲法・自治制度等重要なる法令事項に関しては勿論、苟くも国利民福を増進すべしと思惟せる事物に就ては、毫も倦色を示したることなし。」(3)と驚嘆せしめたのである。

第二に、この木戸自身の手による「知識」「情報」の獲得に加えて、彼は多方面の識者を自己の周囲に集め、彼らの専門的研究による深い理解にもとづいた知識を摂取することにつとめている。いわば木戸のブレーンの役割を果したこれらの人々のなかでも、維新前後においては西欧近代兵学の先駆者大村益次郎が、明治初年においては当時ドイツ政治制度研究の第一人者であり、のちに日本の外交史上重要な地位を占めた青木周蔵がその代表的な例である。さらに福沢諭吉、加藤弘之、西村茂樹ら明六社同人の啓蒙思想家も、木戸と意見を交換し、木戸のブレーンの役割を果したのである。木戸は彼らを通じて、各分野における当時日本の最高の知識を活用しえたわけである。

このような「知識」「情報」獲得へのあくことなき関心それ自体に、つねに全体的状況を自らの視野に入れようとする体制「構想者」の努力があらわれていることはいうまでもない。この全体的状況認識を土台に、入手された「知識」「情報」が、幕末の転変きわまりない情勢の中で鍛えあげられた木戸の鋭い状況判断と練りあわされるとき、「経世的見識」に富んだ前述のごとき諸構想が生み出されたといえよう。本研究の視角から言えば、幕末の「危機」によ

って既存の秩序に依拠しえなくなった一人の青年剣士桂小五郎が、このように新しい政治体制の「構想者」の地位を獲得するに至るまでの過程――いかに既成の秩序観を否定し、変革の論理を提起し、かつ新たな秩序構想の根底となった思想を形成していったかがここでの問題である。

ところで、前述のごとく、木戸が自らの周囲に多くの人々を集め、彼の「構想」立案に参与せしめ得たのは、彼が長州閥の総帥であったという勢力関係とともに、木戸自身の温和な性格に助けられたものでもある。木戸が彼らにたいしてつねに細かな気を配ったことも、彼の伝記執筆者たちが共通して特筆するところである。木戸のこのような性格は、一般に彼の周囲の人々の目に、彼をおだやかで親しみを覚えさせる人柄と映じさせた。かつて師である吉田松陰によって「桂小五郎寛洪（かんこう）の量温然愛すべきの人なり」[4]「五郎は懇篤なり、……親しむべし」[5]と評された人柄ゆえに、木戸は人々に迎えられ、また多くの人望を得た。幕末において藩外交の任にあった木戸は、この人望に助けられて「周旋」に成功し、また多様な人々と接触することによって、彼の思想的視野を拡げていったのである。維新後も、たとえば一八七二年（明治五）、当時一留学生としてアメリカにあった新島襄は、渡米してきた木戸特命全権副使とワシントンで会見した際、その時の印象を次のように述べている。「副使の態度は極めて紳士的で、好感を与えられました。……私は晩餐の食卓で、全く打ち寛いだ気持をもって副使と相語りました。しかも、アンドヴァー（当時、新島が在籍していた神学校）の倶楽部で、恰も同輩学友と談笑するが如く、親しく語りました。」[6]それをきっかけに、新島はしばしば木戸と会見して、国民教育に関する意見をのべ、木戸を「普通教育にたいする一大朋友」[7]として信頼を寄せている。一方木戸は、新島について、日記に「得其益不少。後来可頼之人物也。」[8]と記している。

しかしながら他方、西郷が度量の大きさで、大久保が剛毅な性格で、彼らの「英雄」のイメージをますます豊かにしているのにたいして、木戸の知識人タイプの、柔和で情緒的な、また病弱ゆえにときには陰気でさえある性格は、

歴史上の人物としての彼の印象を曖昧で捉えがたいものにしているのも事実である。西郷が「国民的英雄」の座をゆるぎなきものとし、大久保が近代日本最大のステーツマンと仰がれるのにくらべて、維新史における木戸の影はうすいと言わなければならない。さらに大久保の冷徹さと比較するとき、木戸は彼の「情緒的」な性格のゆえに、自己の願望を抑制しつつ時期の到来をまつという政治家の資質――「行政の手腕」を欠くこととなった。そのために、自らの卓越した「見識」にもとづく「構想」を自分の手で現実化しえないという、政治家としての焦燥感を味わねばならなかった。その結果、自己の「見識」にたいする自負は、ややもすれば「泰山に登り天下を小と見る」[9]という「高踏的」な姿勢をとらせ、あるいは伊藤博文ら新進官僚の説を「軽薄浅学」と退け、彼らに対する不満となって爆発し、また一方、みずから書画骨董など風雅の道――非政治的、「情緒的」世界へと逃避していった。こうして、木戸の「構想」が大久保、伊藤らの手腕によって次第に「具体化」されていく一方、木戸自身は維新政府にたいする鬱勃たる不満を胸に、その中心部から遠ざかっていくのである。

(1) 幕末期政治思想における政治的リアリズムの形成過程を追っているものとしては、松本三之介「尊攘運動における近代的政治意識の形成――政治的リアリズムの胎動」(『天皇制国家と政治思想』未来社、一九六九年、所収)がある。藤田省三氏は、木戸においてわが国にはじめて、徹底的な政治的リアリズムに裏うちされた近代的国家技術が成立したとしている(『天皇制国家の支配原理』未来社、一九六六年、四八頁以下)。同時代のトップリーダーの政治思想については佐藤誠三郎「大久保利通」(神島二郎編『権力の思想』現代日本思想大系10、筑摩書房、一九六五年所収)がある。木戸の伝記は、妻木忠太『松菊木戸公伝』(上・下、明治書院、一九二七年)、冨成博『木戸孝允』(三一書房、一九七二年)などがある。またアルバート・M・クレイグ「木戸孝允と大久保利通――心理学的歴史分析の試み――」(クレイグ、シャヴリ編『日本の歴史と個性』下、ミネルヴァ書房、一九七四年所収)は、両者のパーソナリティを通して彼らのリーダーシップに分析のメスを入れている。

(2) 徳富蘇峰『木戸松菊先生』民友社、一九二八年、三六頁。

(3) 『青木周蔵自伝』平凡社東洋文庫、一九七〇年、六三頁。

(4) 「上書」『吉田松陰全集』大和書房、一九七二年、第五巻、六五頁。
(5) 「念八日、自書の後に書して桂生五郎に贈る」同右、第四巻、四九二頁。
(6) 徳富蘇峰『三代人物史』読売新聞社、一九七一年
(7) 一八七二年（明治五）三月二八日付ハーディ夫妻宛書翰（渡辺実『新島襄』吉川弘文館、一九五九年、八五頁）
(8) 『木戸孝允日記』（日本史籍協会叢書東京大学出版会、一九七一年）、二、一八七二年、二月二四日の項。
(9) 「井上馨宛書翰」『木戸孝允文書』、（日本史籍協会叢書）、四、二七三頁。

一

幕末・維新の政治史において、一八五三年（嘉永六、癸丑）六月のペリー来航が、一時期を画する決定的な曲り角であったことはいうまでもない。それは第一に、この事件以後、そもそも「外圧」の問題をぬきにして政治を論ずることができなくなったという意味においてである。この問題は、切迫した危機感をともなって、幕末政局の展開全体を覆う政治課題となったのである。第二に、しかし幕府は、この課題を独自に解決する能力をすでに失っており、やむなく朝廷・諸藩にその対応策を諮問せざるをえなかった。そしてこのことが、前者の権威失墜を公然たるものにするとともに、やがて後者の相対的な権力の上昇をもたらし、それ以降三者の権力的比重が大きく変動して、二世紀半にわたる幕藩体制が崩壊していく直接のきっかけとなったのである。この二重の意味で、「外圧」は幕末政治への巨大なインパクトであったといえる。そしてここに、「外圧」とそれにともなう内政混迷の危機打開を自らの政治的使命とする「志士」が、幕藩制位階秩序（ヒエラルキー）の亀裂の中から政局に登場してくる。朝廷・幕府・諸藩の動向に彼らの「横議」「横結」が加わることによって、幕末政治状況は流動化を強めていくのである。

木戸孝允は、このような時代の政治的環境が生み出した、最も典型的な政治家の一人であったといえよう。医者の

家に生まれながら、少年のころから木戸は剣術・馬術の修業に励み、「一剣ヲ負ヒ、山陵ヲ巡拝」[1]することが彼の望みであった。[2] 変革期の鼓動を敏感に感じとりつつ、武士としての自我意識に目覚めていった木戸は、他方「太平の因循」に慣れきった周囲に飽き足らぬ思いを抱いていた。[3] その野心と不満とが、彼をして武士の証しである武術の修業に自らの情熱のはけ口を求めさせていったといえよう。

その剣術修業のため、江戸の斎藤弥九郎道場に遊学していた木戸は、二十歳という多感な年令においてペリー来航を目のあたりにした。今や「外圧」の脅威は、「黒船」という具体的な威圧感をもって彼に迫ってきた。この事件を契機に、木戸の情熱の対象は武術修業から「外圧」の危機打開の模索へと変わり、[4] 彼は青年剣士から「志士」へと変貌をとげる。[5]「外圧」の衝撃を象徴する「癸丑」は、政治的原体験として終生木戸の記憶に深く刻み込まれたのである。

この時期の木戸の考え方を伝えるものとしては、「相州海岸警衛に関する建言書」[6]とその草案（「時勢論の建言書草案」）[7]があるが、そこに見られるのは、長州藩は幕府に協力して攘夷を遂行すべしという、幕藩体制強化の主張であって、そのことはまた結果的に「尊皇」を実践することでもあるという見解である。当時の大多数の意見と同様に、幕藩体制における朝廷・幕府・諸藩の位階秩序、およびそれらと攘夷という政治課題との間には、いまだ何らの矛盾も意識されてはいないのである。

だが、この二つの文書からも木戸の思想的特徴を読みとることは可能である。その第一は、農民兵の構想である。これは海岸守備兵力の不足を農民兵によって補おうという構想であるが、膨大な人口をもつ農民の潜在的エネルギーに注目しているところに、後年における木戸の思想の萌芽があらわれているといえよう。[8] 第二点は、軍艦の製造と海上操練、海岸防衛のための「巨炮」の鋳造、「西洋野戦炮隊之制度」の採用など、西洋軍事技術・制度の導入を積極的に提唱していることである。

後者については、すでにペリー来航の二ヶ月後、木戸は早速当時砲術の大家として知られていた江川太郎左衛門[9]に師事して西洋兵学を学んでいる。翌一八五四年（安政元）には下田でロシア軍艦の修理を見学し、翌々年には下田与力中島三郎助から造艦技術を学んだ。蘭学の本格的な研究を始めたのもこのころからであり、東条英庵、神田孝平について軍艦製造や歩兵調練の原書を講読している。[10]旺盛な探求心は木戸生来のものだといえるが、そもそも彼が西洋科学技術を修得しようとした動機については、師松陰の影響も見のがすことができない。「審彼之情勢知可畏而不可怖者、是讀書人之任也」[11]として、「黒船」の脅威の内実に迫っていこうとする姿勢からは、松陰と同じく西洋の軍事力にたいする現実的な評価が生まれている。「人の巧を取て我拙を捨つ、人を長を取て我短を補、是は則天地間当然の理と存申候。国体に関る處は是等の處には無之と存申候。」[12]という、西洋軍事技術の導入についての積極的かつ開かれた態度は、このような評価にもとづいていた。

しかも木戸は、この西洋科学技術の優秀性について、「今、西洋の勢を察するに……其器械は克く理を究め、周旋に軽便す。然り按するに、今、器械兵法は兵馬の巷に研究し、実にして華に有ず。近頃彼の長する處也矣。」[13]と述べているように、彼の国の「究理」が実際の経験に裏づけられた、いわば経験主義的な「理」であることに注目している。このことは、木戸のその後の思想形成において重要な意味をもってくる。

しかしながら、新しく「発見」されたこの思考のはたらきも、まだ思想の深部で進行するにとどまり、新しい政治的行動を支える発想として結実するまでにはいたっていない。当時木戸の念頭を占めていたのは、むしろ「外圧」の圧倒的な危機感であり、それゆえそれに直接的に反発する、より心情的な観念の問題に関心の多くが注がれていたからである。そして、木戸のそのような問題関心にこたえたのは後期水戸学の「正気」の思想であった。

すでに一八五三年（嘉永六）、木戸は斎藤塾で同門となった、水戸藩士で藤田東湖門下生の袴塚行蔵を通して、水戸

学の思想的影響を受けており、東湖の「常陸帯」や「回天詩史」を愛読していた。また斎藤弥九郎が水戸藩の御抱えであったことから、自然水戸人と交際する機会も多く、東湖の子小四郎とも親交をむすび、またしばしば水戸藩邸に武田耕雲斎を訪うては時事を談じていた。[15] このような接触をとおして次第に、「正気」論は彼の思想に浸透していったと思われる。

その「正気」論は、会沢安の『新論』に「天は昭々之れ多し。而して人は其の中に在りて、天地の気は、常に全身に潜行して、而して生活するなり。故に人は之れ天地と、亦同一気なり。而して其の元気は固より天地と通ず。[16]」と述べられているように、「理」と「気」によって世界の存在を説明する儒教的存在論にならいながら、「気」に注目し、それが「天」を源泉とし自然および人間にあまねく貫流する生命力であるとする理論である。そこではまた、「気」は、集中すれば本来のエネルギーを発揮するが、分散している場合はただ宙をさ迷うにすぎない、という性格をもっているとされる。人間社会に関していえば、「気」が集中すれば士民に「精気」が宿り、生産は盛んとなり、社会も団結力を生じて安定するが、「気」が分散すると人民は怠惰となり、死者の魂も安らぐことができずに「游魂」となって宙をさ迷い、ひいては生者も来世に不安を感じて社会的混乱が生ずるということである。このように集中・分散のたびに盛衰をくり返すというダイナミックな思想構造は、流動化しつつある政治状況を眼前にしていた人々の状況認識にまさに適合的だったといえるであろう。

後期水戸学は、この「気」が特殊日本の自然と民族社会とに集中しているとして、日本の国土と歴史に伏流するこのエネルギーを「正気」(あるいは「元気」)と呼んだ。こうして藤田東湖が、「天地正大ノ気。粋然トシテ神州ニ鍾ル。秀デテハ不二ノ嶽ト為リ。巍々トシテ千秋ニ聳ユ。注イデハ大瀛ノ水ト為リ、洋々トシテ八洲ヲ環ル。」「世汚隆無クンバアラズ。正気時ニ光ヲ放ツ。……人亡ブト雖ドモ英霊来ダ嘗テ泯ビズ。長エニ天地ノ間ニ在リ。[17]」と歌った「正

気の歌」は、志士の間に広く愛誦されて、彼らの胸奥をこの思想で満たしていったのである。幕末尊攘派の志士は、「外圧」の危機が深まるにつれ、対外危機打開のきめ手として、この「正気」に心情的な期待を寄せていった。彼らは、西欧列強にたいする敵愾心を燃やし志気を鼓舞しては我が気概に「正気」を宿らせんとし、また互いの議論や行動に「正気」の発露を見出しては連帯感を強めていったのである。その意味において、「正気」は尊攘派のエートスであった。[18]

木戸もまた、この「正気」論に共鳴した一人であり、たとえばハリスと幕府との交渉を耳にするにつけても、「當今の次第にては、松前より先、唐・大嶋に至る迄、不遠内英仏のものに相成候かも難計」と、優柔不断に歩一歩と後退する幕府の態度に危機意識を抑えきれず、「要路に一英雄な」き現状では、「真の日本の元気に復」[19]することだけが打開の道であると考えるようになっていったのである。たとえば一八六一年（文久元）二月のロシア軍艦の対馬占領に際しては、対馬藩士の抵抗を、「一同死地に座し、国家の大恥を雪んと要す。其大義之貫處一目瞭然、感涕数行」[20]と共鳴し、その「正気」を援助しようと奔走している。「正気」の有無を基準とするこのような評価によれば、概成権力の温存をはかりつつ「外圧」に対処しようとする幕府および諸藩の態度は、「士気」が衰え「病症一層相重」なって、「所詮神州之元気を回復仕候目途決て無御座」[21]と映ずる反面、ひたすら攘夷の実現をめざす「志士」の意気こそ期待すべきものとなった。木戸が西欧諸国との軍事力の絶対的な隔差を知りながら攘夷思想を肯定したのは、尊攘派の「正気」のみが国家の対外的主体性を回復せしめうると確信していたからである。

志士としての木戸の活動は、高杉晋作、久坂玄瑞はじめ、先輩格にあたる彼に信頼をよせる松陰門下のグループを足がかりに、尊攘派志士の全国運動の中で行われたが、彼ら志士の間に浸透していった「正気」論が彼らの実践行動にいかなる影響を及ぼしていたかは、たとえば尊攘激派の全国的リーダーである久坂玄瑞の場合に一つの典型が見ら

れる。久坂の思想は、松陰に「強覧精識」と評された、きわめて豊富な古典的教養の色彩を帯び、「大義名分」論によって支配されていた。志士としての活動のかたわら、「義理」「名分」「攘夷」にかかわる「美談盛事」（歴史上のものも含めて）を非常な関心をもって書きとめ、[22]その顕彰を企てているのは、久坂のこの思想的特質の所在を示すものであるが、彼はそれらの事件にあらわれた「正気」の非合理的なエネルギーを汲みとっては自らのエートスをかきたて、またそれへの共鳴のうちに、「正気」が「皇国」に古今にわたってあまねく潜在するという信念を固めていったのである。幕末の最も流動的な政治状況に身を投じて時代をリードしていった政治的情熱と、彼が全国の「志士」に寄せたあつい信頼の底には、この信念が脈打っていた。

しかし他方、久坂においては、名分論（「華夷の辨」）が「正気」論のナショナルなエートスによって増幅される結果、観念のレベルで「外圧」を受けとめる傾向が強く、彼の西欧にたいする反発と警戒は、とりわけ「妖教」（キリスト教）の流入とそれを用いての民衆懐柔に向けられていた。西洋軍事技術の導入についても、一応は「捨短取長、固時勢之所不得已」[23]と認めながらも、洋学の学習が「士風」「忠孝之道」を衰えさせるのではないかという危惧の念を棄てきれなかった。久坂自身、木戸と同じく長州藩藩医の家で育ち、しかもすぐれた蘭学者を兄にもちながら、右のような内面的葛藤にさまたげられ、再三にわたって洋学の修得を中途で放棄している。そして「外圧」にたいする、このような観念レベルの反発は、応々にして「拒西洋諸夷者、不在大艦巨砲而、當大興教化也」[24]という精神主義に彼を追いやったのである。

このような「正気」論のナショナルな性格と、とりわけそれから派生する観念的、精神主義的傾向が尊皇論とむすびつくとき、そこにいわゆる尊攘激派とよばれる急進的行動が人々を支配するにいたる。後期水戸学を母体とし尊攘派に迎え入れられたこの思想における尊皇論の位置と性格について、たとえば『新論』は、「人は之れ天地と、亦同一

気なり。而して其の元気は固より天地と通ず。」という、前述の「正気」の存在についての説明に続けて、「人を以て天地を祭らば、亦感応せざる莫くして、而して昭昭の多きは、頼りて以て顕はる。是を以て聖人は天に事へ先を祀り、幽明憾無くして而して天下服す。」[25]としている。つまり「粋然トシテ神州ニ鐘ル」とされた「正気」も、「世汚隆無クンバアラズ。正気時ニ光ヲ放ツ。」と言われるように、つねに集中して本来のエネルギーを発揮するわけではない。そのためには「正気」の源泉である「天」と、「正気」の担い手である人とを媒介するものが必要である。それが「祭」であり、それを司るのが「聖人」である。

ここでいう「聖人」は、天皇を指すが、それは「正気」論が現実政治に接続する要ともいうべき重要な位置を占めている。そしてこの尊皇論が現実政治に投影されるとき——外交内政にわたる失政が反幕府的気運を高めるにつれ、かわって「正気」を極大化すべき祭政一致の古代国家の理想像が浮上してきて、政治主体としての天皇の姿が現実性を帯びはじめてくるのである。一八六一年（文久元）なかば、木戸は「実に當今の次第にては正気凝滞」[26]することを理由に倒幕を決意し、「叡慮御遵奉無之候ては、所詮天下之人心折合間敷」[27]と述べているが、幕末政局に発言権を得てきた朝廷の意志に政治的正当性を見出し、それに服することによって「外圧」に抗しうる強力な国内的統合が達成されるという考えには、このような思想的根拠が存在していた。ここで留意すべきは、尊攘派の全国的リーダーであり、やはり水戸学の思想的影響をうけた真木和泉（一八一三～六四）、平野国臣（一八二八～六四）の尊皇思想が、多分に思い込みの天皇個人へのパーソナルな忠誠を核とし、「古今不出世の明天子」（平野）である（孝明）天皇の「聡明叡智英烈勇武」（真木）をその裏づけとしたのにたいし、木戸・久坂・高杉ら、ペリー来航後に「外圧」というナショナルな課題を担い、「正気」論の影響をつよく受けて登場してきた世代の間では、尊皇思想の重心はあくまで天皇を媒介にして湧き起るべき、志士ら多数者のナショナルなエネルギーにあった。いわば前者が、勅命は勅命であるがゆえ[28]

に従われなければならないという、道義的なタテの関係を重視するのにたいし、後者の「叡慮尊奉」は、それが「天下之人心折合」というヨコの連帯を生み出し、幕藩体制のタテの支配原理に対抗しようとする意図をもっていた。

だがこの「正気」論も、たとえば名分的オプチミズムと接続するとき、それが本来もっている心情的期待や観念性が政治的判断にまで噴出してくることとなる。「君臣の分、正邪の辨、明白に相立申さず候事にては、幾万年を経候ても、忠臣義士の英魂、天地の間に磅礴仕、子々孫々その志を相継、桜田・東禅寺・坂下等の如き事も絶ゆる事なく出来仕り申すべく、とても人心一和と申事相叶わず候。人心一和は君臣の分相立、正邪の辨分明に相成候上は、直様成就仕るべく候。」[29]という久坂の「叡慮遵奉」論には、すでにこの傾向があらわれている。また「大義名分」論は、先験的な価値判断ゆえに、状況認識にあたっては規範主義的、観念的な段階にとどまったが、それゆえに政治状況の転変きわまりないその場その場の決断においてはオプチミズムの介入をゆるし、「機去機来如風」[30]「此節の狼狽に乗じ、人心の帰向に御随ひ被在度候。機会と申ものは難得易失ものに候。」[31]という機会主義に道をゆずることにもなった。[32]その結果は、「政府（藩）はまず度外に打置、各国有志の士相互に連結して尊攘の大挙これありたき事と思詰」[33]というように、「各国有志の士」の「正気」に過大な期待をかけ、ひたすら「尊攘の大挙」の機会をうかがわせることになった。とりわけ致命的というべきは、彼ら尊攘激派が強大化した藩の実力を見誤ったことにあった。そのため一八六四年（元治元）八月、幕府とむすんだ薩摩藩・会津藩が尊攘激派および長州藩を京都から追い出した、いわゆる禁門ノ変において一敗地にまみれることとなったのである。[34]

一方、木戸は古典的教養の世界に入り込むことなく、いち早く現実政治の渦中へ投げ出されていた。そして、そこで彼の思想形成は行われた。すでに一八六〇年（万延元）の水戸・長州同盟工作にはじまって、彼の主要な政治活動は、自藩と他の諸雄藩との連合を目的とする藩外交工作活動――「周旋」にあった。その活動のために、木戸は江戸

・京都・諸藩を駆けめぐり、ペリー来航後の十数年間に自藩に滞在したのは一年にも満たなかった。尊攘派志士の運動がもつ同志的結合のルートを利用し、自藩はじめ尊攘派に同調する諸藩を連合せしめ、志士運動のエネルギーと諸藩の権力を結合し動員しようというのが木戸の運動論であった。藩内における木戸は、一方尊攘激派とむすび、他方藩政府主脳の信用も得ているという、いわば「中間派」であった。だが、その不安定な立場と微妙なかけひきゆえにくり返し遭遇する現実との摩擦は、オプチミスティックな予測や観念的な思考に依拠することをゆるさなかった。また、「周旋」家ゆえに、尊攘激派から横井小楠、佐久間象山や松平春嶽、勝海舟など幕府内改良派までも含む広い交渉範囲をもっていたことは、彼の視野を広げるのに役立った。久坂、真木ら尊攘激派の目がひたすら京都を向き、「京都入説」の成果に期待をかけていくのにたいし、木戸の目は全国政治状況を構成する諸要因にまんべんなく注がれ、それゆえに、分裂と流動化の様相を強めていく幕末政治状況の渦中から次第に抬頭してくる諸藩の実力を見逃さなかった。「正気」論のもつヨコの広がりとダイナミクスは、木戸にはむしろ藩の枠をこえたヨコのつながりと流動的な状況認識を可能にする動態的な視野を与えたのである。木戸は一八六二年（文久二）十二月、「一体此往之所、是より他藩へ信義を失ひ候ては不相済候得共、遂には独立の了簡に決着仕居不申ては、所詮事業も挙り申間敷」[35]と自藩の「割拠」を提唱した。つまり、武力が前面に出てきて「内乱旦夕も難計」と洞察したがゆえに、賀茂・石清水の攘夷祈願行幸を実現して意気あがる尊攘激派を、「一時之快に乗じ御国有志のものむやみに出国仕候ては、御国の脉は丸々抜け候て、他日一変に応じ候事も出来兼候」と批判し、「実着」に「飽迄、先国本を相固め候儀肝要に御坐候。」[36]と、このさき物を言う藩の実力をたくわえることを主張したのである。

ところで、政治的対立がエスカレートし、幕府・諸藩の武力が前面に出てくるようになれば、「朝旨」とはいってもそれはパワーポリティクスの波間に漂うものでしかなくなり、その政治的正当性は失われざるをえない。この事実

を前にして、木戸は「朝旨遵奉」にかわる新しい行動の指針を求めていた。そしてその解答を、われわれは次のような木戸の言葉の中に見出すことができる。ここでは木戸は、藩主にむかって「割拠」に際してのリーダーシップについて説いている。「癸丑巳前と癸丑後と形勢一寸違えば、癸丑巳後と戊午（安政大獄の年）後と三寸違ひ、一昨夏（八・一八ターデタ）己来之処にては五寸も違ひ候歟。今日之處にては、最早一尺と相違候事に付……癸丑、戊午、壬戌（文久二）と段々違ひ、到今日大に違候處を被思召、御親ら御料理被遊云々。」[37]

「癸丑」以来の激しい状況の変化を回顧しながら、木戸は「外圧」の危機打開という究極的な目標と現実にたどってきた歴史との間に次第に広がっていくミゾを感じとっている。そして木戸は、このミゾを埋めるためには、リーダーシップの照準をあくまでも究極的な政治課題にむけてしぼっていくというラディカルな方針をとるべきであると主張した。すなわち「只誠之一字と條理之正敷を以御處致被為在候時は、皇国必一致、一団之正気と相成云々」[38]というように、「外圧」の危機打開という究極的目的の追求をあらためて基本方針として確認することにより、その指導下にある者の広汎な同意と強力な団結を獲得していこうというのである。ところでここでいう「條理」とは、状況の激動にもかかわらず、いやそれゆえにこそ、そのような状況の中で究極的な政治目標に一歩でも近づくためにはどのような方針をとればよいかを追求する目的合理的な思考であるといえる。それはまた、具体的な政治状況のただなかで現状認識と過去の経験にもとづいて発見されるという意味では、いわば経験主義的な「理」だといえるのであり、かつて木戸が西洋科学技術を習得した際に得た思考法が政治思想のレベルに浮上してきたといえよう。同時に、動乱期の流動化した政治状況が、その環境の中で活動する指導的な政治家の内に必然的に生み出す思考法でもあったといえよう。[39] 木戸は、かくして「正気」論の観念的世界を脱却し、「條理」のいわば合理的思考に到達した。しかしながら「正気」論が放棄されたわけではなく、木戸はなお尊攘派志士の間に脈打っていたこのエートスこそ、「外圧」をは

ね返す起死回生のエネルギーの源であると信じて疑わなかった。木戸は「正気」に国民的意識の萌芽を見出していたといえよう。それゆえにまた、木戸は政治的世界を構成している心情的側面に鋭敏な感覚をはたらかせている。政治における目的合理的思考と心情的側面についての理解との思想的な統一は、たとえばさきの「條理の正敷を以御處致被為在候時は、皇国必一致、一団之正気と相成」という構想にも見られるところである。木戸のその後の政治活動は、「一割拠」した藩の権力を基盤に、経験的判断を指針としつつ、ナショナルなエネルギーを喚起する、つまり「皇国」を「一団の正気」と化して「外圧」を克服することであった。(40) しかしながら現実政治の局面は禁門ノ変によって一転し、尊攘激派および長州藩とともに木戸をいったん歴史の舞台からひきずりおろした。

(1) 妻木忠太『松菊木戸公伝』上、一一五〇頁

(2) その望みは、出府一年後に江戸屈指の斎藤弥九郎道場の師範代になったことで満たされたといえよう。師松陰も、当時の木戸を「顧ふに桂生は武人にして書生に非るなり。」と評している。(田中惣五郎『木戸孝允』千倉書房、一九四一年、十二頁)

(3) 当時木戸は、周囲の武士にたいして「一体、士は僕実にして農に似たるを不嫌、伶俐にして商に似たるは大に愧へき」(『木戸孝允文書』一、一〇七頁)「天下之人、酔倒人之如く、口に忠孝節義を称する者さへも無之、まして赤心を以国家に報効を計る者は僅々たる事にて、是を以て(外国と)軍などゝは可笑之至り候。」(同上、八、一頁)というような批判をしばしば口にしている。

(4) 一八五三年(嘉永六)六月二十日の木戸の日記は、彼の人生の転機の一コマを示している。「廿日、撃剣、辰過時出レ門尋二塚生一(水戸藩士袴塚行蔵―五十嵐、以下同様)、訪二都下議論一(ペリー来航のこと)、未無二別論一、……昼後訪二周布氏一(政之助)、又出二西洋器械窮理小形一、又江川(太郎左衛門)議論、以レ問二和西所一以レ然、周布氏以レ和、斎藤氏小二西洋一、可レ耻、我無学浅心故、未レ知二両端是非一、晩時帰門、惶慨紛々、独哀二吾愚痴一、夜読レ書」(妻木忠太『木戸孝允遺文集』泰山房、一九四二年、二一〇頁)

(5) 松陰の、「桂は童年乃ち来りて吾を見たり。吾、時に其質厚きを知りて未だ其志気を知る能わず。其志気を知れるは癸丑六月に始まる。」(田中前掲書、二〇頁、傍点は五十嵐、以下同様)「小五郎には一年計隔相対致候處、所謂居は体を移すものか、余程人物見揚け候物に成り、小生に於て何か少しは恐をなし申候。」(『松菊木戸公伝』上、三五頁)という言葉は、木戸のこの変貌を証言するものである。

この事件に遭遇して、当時同じく江戸で剣術修業中の坂本龍馬も、同様の変貌をとげていた。(マリアス・B・ジャンセン『坂本龍馬と明治維新』二、(三)参照)数年後の高杉晋作もまた同様である。彼の場合は、松陰と彼の実践的な学問に接触したことが転機となっている。

(6) 『木戸孝允文書』八、一～七頁

(7) 同右、八、三六―四二頁

(8) 木戸は、農民兵の生計など民政に配慮するとともに、彼らの素朴なナショナリズムをも計算に入れている。「調練之日丈は彼等も田野耕耘し も相成り不申故、哉は年貢を御減し被成候か、又其日々々御雇に相成り候か、何卒彼之馴伏致し候様御取扱有之時は、御恩を感し十分精力を盡し御用にも相立候と奉存候。況や数代土着之者に御座候得は、父母之地を賊夷に侵掠被致候事故、上より御諭により候てはいか程も奮興仕候と奉存候。」(『木戸孝允文書』八、四頁)

(9) 木戸は斎藤弥九郎を通して江川の門下に加えられた。前述の二つの構想は、ともに江川の影響力がはたらいていると思われる。

(10) 当時江戸にあった松陰は、萩の兄に次のように書き送っている。「洋夷と戦ふの陣法、弟に定論御座候。……孰れの道、大砲小銃、西洋法ならでは迚も勝て申さず、本藩人の力を此の事に竭すもの独り小五郎一人あるのみ。」(『吉田松陰全集』大和書房版、第七巻、一八五頁)

(11) 一八五五年(安政二)五月、木戸は松陰に今後の目標を述べている。「僕、固浅学疏陋と雖、今より天下之情勢を探索し、如教、内海陸之備一人より練り立候事を精窮仕度存候。而し其主たる處は則火技なり。」(『木戸孝允文書』一、一五頁)このころ木戸は、藩から将来軍艦製造技術者となることを期待され、その修業のための給付を受けていた。

(12) 「粟屋彦太郎宛書翰」『木戸孝允文書』一、二頁

(13) 木戸は、一日も早く藩が西洋銃陣に改革すべきことを力説したのちに本文の自説を展開しているが、続けて次の様に述べている。「佛暗墨魯等の諸夷、火器は元より我より長し候處、若是に火器なき時は如何、尚不足恐也。是等各国幾千里を隔て、其兵勢に至ては大同小異。是等の處にも可見事に御坐候。」(『木戸孝允文書』一、二三頁)『木戸孝允文書』八、四一頁)

(14) 兵器が実用的でなければならないことは、当時も多くの論者によって指摘された。木戸の場合、西洋の武器がなぜに実用的になりえたかという問題に踏み込み、思考法のレベルでその解答を見出した点が注目されるのである。

(15) 北条重直『水戸学と維新の風雲』東京修文館一九三二年、四五五頁以下参照。

(16) 会沢安『新論』岩波文庫版、二一五頁

(17) 橋川文三編『藤田東湖』中央公論社、一九七四年、五〇一頁

(18) 高杉晋作は、一八五八年(安政五)長州藩宿老益田弾正への上書において、「神州は天地の正気の鍾るところ、しこうして勇武は海内に卓絶」することは、歴史的にも「北条時宗は蒙古十萬を九州に殲し、加藤清正は明兵百萬を朝鮮に敗り、織田信長は耶蘇伴天連を海外に放」ったことに証明されているとして、今ここで、「正気を一振」し攘夷開戦して必死に戦えば必ず「神州の正気」も従って振い勝利を得ると主張している。(『高杉晋作全集』新人物往来社、一九七四年、下、二七九頁)

(19) 『木戸孝允文書』一、三五―六頁
(20) 同右、一三二頁
(21) 同右、一三一頁
(22) 「俟采択録」(福本義亮『松下村塾偉人・久坂玄瑞』誠文堂、一九三四年、三九一頁以下)は多数の、主として歴史上の「美談盛事」の記事からなっている。
(23) 「江月斎日乗」万延元年二月十五日(福本、同右、二五九頁)
(24) 「九仞日記」安政六年七月八日(同右、二三九頁)
(25) 会沢、前掲書、二一五頁
(26) 『木戸孝允文書』一、一三四頁
(27) 同右、一、一八九頁
(28) 「上島津久光公書」『平野国臣遺稿』平野国臣顕彰会、一九一六年、三七頁、および『真木和泉守遺文』真木保臣先生顕彰会、一九一三年、五四頁
(29) 「長井雅楽弾劾建白書」福本前掲書、五一四頁
(30) 「桂、高杉宛書翰」妻木忠太編『久坂玄瑞遺文集』三二七頁
(31) 「政事堂宛書翰」福本前掲書、七七一頁
(32) 「機」、「勢」という政治状況の非合理的要因に注目し、それに尊皇の道義と自己の願望の実現を賭けるという思考は、真木や平野にも顕著に見られる。それはまた、藩ことに薩摩・長州という大藩の権力の上に立って行動することが「上策」(「義挙三策」文久元、十二月『真木和泉守遺文』一九二頁以下、「回天三策」文久三・四月『平野国臣遺稿』、四五頁)であるとしながらも、それを望みえない彼らの「活路」でもあった。尊攘派の運動が最高潮をきわめようとする一八六二年(文久二)、真木は久坂に次のように書き送っている。「扨、御着眼は申上候迄も無二御座一候へ共、勢と申者容易に人為に而は不レ被レ致者に御座候處、此節諸侯方表立入衛、士林民間に至迄京都に眼を注候事、実に千歳一時、往昔は其例無レ之、後来も可レ知事に御座候。個様之勢を得候而、尋常之事共謀候而可レ宜哉。第一等に出候而、三千年之舊に可レ復事に可レ有レ之云々」(『真木知泉守遺文』二五七頁)
(33) 「無宛書翰」福本前掲書、四六四頁
(34) 久坂は土佐勤皇党の同志武市半平太にあてて、「諸侯頼むに足らず、俗吏頼むに足らすと存し候。之を頼み之に依る様にては、迚も天下に裨益する事は相叶まじく、此節は仕方無レ之様に存し候也。」とのべ、「因循」な藩当局を見限っている。(妻木前掲書、三三七頁)また、このころから親友であり同志である高杉と戦略上の、ひいては思想上の不一致を生じてきている。

(35)『木戸孝允文書』一、二八七―八頁
(36) 同右、一、三四一―二頁
(37) 同右、二、六―七頁
(38)「横浜鎖港に関する建言書案」同右、八、一九頁
(39)「条理」のこのような登場は、自然観において、伊藤仁斎の「理は気の条理」という命題における「条理」が、朱子学の静態的自然観を批判する仁斎の動態的自然観に対応する経験主義的な「物理」として提示されたことを想起させる。(丸山真男『日本政治思想史研究』五三頁参照)
(40) 木戸は「割拠」すれば長州藩単独の力だけで倒幕をはじめとする変革が可能であると考えていたわけではなかった。むしろ「割拠」が長州藩を孤立させることになるのを恐れていた。「二州丈け之勤皇之思食、灰と相成候ては決て不相済、灰となさゝるは只誠之一字之外無之候。……其中正議之藩は千辛万苦仕候ても連結仕、是非々々外より応し呉候様盡力不仕ては不相叶、是は意心伝心の場合にて、決て喋々と世間に唱られ候事には無之候。」(「村田二郎三郎宛書翰」『木戸孝允文書』一、四一〇頁) 木戸において「割拠」は「正議之藩」の連合とむすびつけて構想されていたといえる。後者はかつて「周旋」工作に従事していたときの構想の延長であり、またのちに薩摩藩などとの同盟として実現されることになる。

二

八・一八クーデタ、禁門の変における長州藩の敗北は、京都にあって藩外交を担当していた木戸に度重なる挫折感を味あわせた。禁門の変後、幕府の追及を避けて、木戸は但馬の出石へと、単身逃亡するが、そこでの日々にも挫折感はつきまとった。自藩や同志たちとも交信を断って、彼は政治の世界のはずれをさまよっていた。(1)

そのような木戸を再び政治の舞台へと招き入れたのは、高杉はじめ奇兵隊に結集した同志たちであった。幕府の圧力に屈服していく長州藩保守派にたいして、高杉の天才的な軍事能力と果敢な行動によって、彼らは藩内勢力のまき返しに成功していた。そして新政権の担当者として、その生存を確認した木戸を呼び戻したのである。こうして木戸

は、慶応年間（一八六五―七年）長州藩政府の中枢的地位を担うことになった。木戸を再び政治の舞台へ復帰させた彼自身の内的動機は、なお燃えつきることなくくすぶり続けていた「癸丑巳来」の「外圧」打開の使命感と、高杉らとともに持説である「割拠」論の具体化を企てたいという政治家としての意欲だったであろう。

高杉もまた、すでに一八六二年（文久二）春に訪れた長崎・上海で西欧列強の圧倒的な軍事力と経済力とを目撃し、西欧列強による日本の植民地化の危機感を一層深めるとともに、それへの対策として藩権力の強化――「富国強兵」の必要性を痛感していた。[2] すなわち「五大州中へ防長の腹を推し出し」[3]て西欧列強と対峙（「大割拠」）[3]するためには、長州藩は「五大州中第一の強富国」[4]たらねばならない。この目標を達成するためには、これまでの攘夷論を放棄し積極的に開国して、貿易による利潤と最新鋭の武器を獲得することこそ急務である。

だが高杉の割拠論は、他方において朝廷工作に依拠する従来の長州藩の政策にたいする批判の意味をもっていた。「廟堂の君子は申すも及ばず、有志の壮士といえども彼（浮浪遊説ノ徒）が口術に浮かされ、愉快に乗じ国外に手を出すようなる事は無益の至りなり。国富み兵強ければ、御両殿様尊攘の御素志は御独立にて御遂げ遊ばさるべきなり。」[5]高杉は、当時もはや藩権力の全面的な動員なしには、有効な政治活動が成り立ちえないことを認識していたのである。[6] 加うるに「六十州中土崩瓦解」は「天然自然の勢」[7]というアナーキーな予測は、高杉をいっそう現実的な権力の確立へと向わせたのである。「民政正しければ、すなわち民富む。民富めばすなわち国富み、すなわち良器械も手に応じて求めらるべし。諸隊の壮士にミネルの元込み、雷フル、カノンの野戦砲を持たしむるときは、天下に敵なし。」[8]

ところで、当時割拠の必要性を認識していたのは、長州藩における木戸や高杉だけではなかった。薩摩藩の大久保利通もまたその一人であった。かつて薩摩藩尊攘派グループ（精忠組）の中心メンバーであった大久保は、一八五九年（安政六）の脱藩計画中止後は、木戸同様「中間派」として尊攘派同志のエネルギーを背景に藩内における発言力

を増しつつ、藩権力を通して全国政局に働きかけることに持前の不屈で忍耐づよい政治力を発揮していた。六二年（文久二）久光が千名の藩兵を従えて上京し、幕府の頭ごしに朝廷と結び、その上勅使をして幕政改革の要求をつきつけさせたことは、藩権力の浮上を物語る象徴的な事件であったが、これ以降幕末政局は諸藩を単位とするめまぐるしいパワーポリティクスの時代に突入していくのである。政治状況の変化にとりわけ鋭い感覚をもつ大久保は、この局面に遭遇して、自己の政治目標を達成するためにはもはや藩権力に依拠するほかなく、そのために自藩の軍事・経済力を充実することこそが緊急の課題であると考えるに至った。(9)

幕府の権威失墜を決定的にし、かわって諸藩権力の相対的上昇をもたらして慶応年間におけるパワーポリティクスの展開の契機となったのは、幕府による第二次長州征伐であったが、それに先立って大久保は、「若、大樹家（一将軍）、龍頭蛇尾ニシテ東下相成候ハヽ、益命令不被相行、各国割據之勢不可疑。依之富国強兵之術、必死ニ手ヲ伸シ、国力充満、假令一藩ヲ以ストモ天朝奉護、皇威ヲ海外ニ灼然たらしむるの大策ニ着眼するの外無之」(10)と、割拠と「富国強兵」を自藩の基本方針とすべきことを主張した。そしてこの頃から、大久保を中心に薩摩藩は、藩政府・軍隊組織の改革、英蘭洋学知識の組織的摂取、武器の購入と開発そして内外交易の振興と、「富国強兵」のスローガンを着々と実行に移しつつあった。

これと並行するように、長州藩においても、木戸や高杉らのリーダーシップの下に、大久保らとほぼ同一の構想をもった「富国強兵」政策が推進されていた。外圧と内乱の切迫した状況下でのこの「富国強兵」政策の担当こそ、木戸や大久保をはじめとして幕末の動乱の中を生き残り維新政府のリーダーシップを握っていく政治家たちの共通体験であった。この体験の中で、近代国家の形成期に適応しうる彼らの政治家としての資質が養われたと同時に、彼らの脳裡にはおぼろげながらも近代国家のイメージが浮かび上っていったのである。また維新後、彼らが実際に新国家建

設の事業に直面したとき、しばしば引合いに出して論じたのは、この幕末における自藩での体験であった。幕末諸藩の「富国強兵」は、維新国家形成の際にモデルの役割を果したといえよう。

そこで、長州藩における木戸の「富国強兵」政策を見ると、その特徴は次の二点にあった。第一点は、藩内外における民衆の支持獲得につとめたことである。そのために藩内民政、ことに民衆および彼らとじかに接触する官吏との間の信頼関係が重視された。この民衆の支持を底辺にして、頂点にある藩主に至るまで、各人の持てる力を挙げて藩の存続に捧げる「挙国」体制の構築が木戸の目指すところであった。また全国政治のレベルにおいても、たとえば米の流通操作を企て、「将軍上洛彼是にて、上国余程高直ニ相成候由、其上馬関ニテオサヘ候得ハ、為此一入人心も動キ可申、其後ニテ又上国へ米上セ候ハヽ、人心ヲ得ル而已ナラス、種々応機ノ策モ可有之ト存申候。」[11]と述べているように、ひろく「人心」の動きが政治状況の重要なファクターであることが認識されている。また、すでに「癸丑」の年に海岸防衛のために農民兵採用を建言したときと比較すれば、ここにみられる民衆像が、日常生活の欲求にもとづきながら、状況に応じて思考し行動する生々しい存在となってきていることに気づくであろう。

第二点は、藩政の権限を藩主へ集中していく中央集権体制確立の主張である。「天下は天下、一藩は一藩、権其上に帰し不申ては終に政事は挙り不申、世間にも此意味合、何卒通徹仕申を只々奉祈念候。」[12]集団がある目的を強力に追求しようとするとき、権力者あるいはリーダーへ権限を集中しようとする傾向は、むしろ当然といえる。だが、つねに藩内の派閥抗争と権限の所在をめぐる論議や陰湿な疑惑に悩まされ続け、他方では幕府側の包囲の中で「富国強兵」政策を急速に遂行しなければならぬ木戸にとって、この要請は、彼の性格が政治の世界につきものの権謀術数と猜疑に耐えぬく頑強さをもたなかっただけに、悲痛な叫びにも似ていたのである。木戸はこれまで全国政治の場で朝廷や諸藩や尊攘派グループを相手に、もっぱら外交的経験を積み、その方面に手腕を発揮してきたが、しかし彼

は大久保と比肩しうるような藩政実務の辣腕も、集団における権力掌握へのあくなき情熱も持ち合わせてはいなかった。内部に対立をもつ藩政を掌握していくことは、木戸の政治家としての性格から考えて不得手な事柄だったのである。

このような窮状に直面した木戸が、中央集権と「挙国」体制の実を挙げ、「富国強兵」の目標を達成する推進力と頼んだのは、一見逆説的ではあるが、封建的忠誠心のもつ求心力であった。そのためには、徳川時代三百年の平和と安定のうちに形骸化した忠誠観ではなく、毛利家が西日本一帯に覇を唱えていた時代に戦国武士が抱いていたバイタリスティックな忠誠観にこそ訴えるべきであった。木戸が「何を申も三百年の古へ復し」「洞春公（毛利元就）御時代の御規模に相復」[13]すべきであるとする復古主義を提唱した意図はここにあった。

もとより、当代きっての近代的軍事技術者である大村益次郎を参謀として遂行された「富国強兵」策は、「実地専務手段専一」というように、現実的・合理的な思考によって指導された。だが、それを推進するエートスとして喚起されたのは「思君之至誠」であり、同時に木戸においては、それがおのずから藩内に「一円之正気」[14]を生み出して長州藩滅亡の危機を打開するエネルギーとなることが期待されるのである。[15]ここでは「正気」は封建的忠誠心から生み出されるとされ、その固有性を強めているかのように見える。しかし他面、封建的忠誠心と結びつくことにより、それをテコにして、その主体を尊攘派グループから長州藩士全体へと拡大しているのである。「挙国」体制は、木戸においてこのように「正気」論の延長上に構想されていたのである。

この点については、高杉もまた同様であった。何よりも自ら率いる奇兵隊がかくまで強力な戦力を発揮しているのが、自藩に「正気」が結集している証しである。「諸隊は防長正気の鐘るところ、義兵を起し賊徒を滅すは自然の勢なり。しかりといえども今日の回復は、すなわち諸隊忠士のなすところにあらず。しこうして先霊鬼神の、諸隊の忠

士をして回復なさしむる所以なり。あに懼れざるべけんや。[16]」「富国強兵」の実行は、奇兵隊に結晶したこの「正気」を藩全体へと拡大した「防長二国の正気」のエートスに支えられていかねばならないのである。そして「上下一和兵勢ノ盛ナル、以長第一トスヘク存候。[17]」という坂本龍馬の評価は、これら長州藩の挙藩体制構想の成功を示している。

ところで高杉は、一見奔放な人柄に見えながら、自らの果断な行動と思想との一貫性をつねに念頭に置く、冷静な内省力と合理的な思考の持主でもあった。それゆえに、高杉自身のエートスの核をなすものが何であったのかを考えることも、彼の思想の特質を探る上にむだではない。高杉の行動の強力なバネとなっていたのは、毛利家および当主にたいするパーソナルな忠誠心であり、それに応える戦国武士的なエートスであった。尊攘志士としての活動に運動の場を見出した久坂や、後述するように全国的統合の視点を強めていく木戸とことなり、高杉は生涯「毛利家譜第思顧の士」という自負を行動のエートスとし、またその立場から離れることはなかった。高杉において「正気」観は戦国武士的なエートスと結合して内面化され、彼自身が「狂」と呼ぶ強烈な行動のエネルギーになった。だが他方そのために、高杉には自藩の立場を越えて全国的統合を構想することは困難だったのである。

では、木戸において、割拠論は全国的統合の構想の中で、どのように位置づけられていたかといえば、高杉とことなり、彼はつねに藩との間に一定の距離を置いていた。出自からして、二十石取りで蘭学系の藩侍医である生家には、知的で自由な空気が漂っていたと思われる。それゆえ藩への帰属感も、本来弱かったであろう。加うるに、京都・江戸を中心とする十数年間の「周旋」活動の結果、この帰属感はますます薄まっていくに反して、木戸は全国政治を展望する視野を獲得し、またそこに自己の活動の場を見出していったことは前述のとおりである。さらにまた、本章冒頭で述べた挫折体験から、木戸は現実政治をつき離して客観視（デタッチメント）する姿勢を身につけるようになったのである。このような姿勢は、維新後にはとかく政局を「達観」し、あるいはそれから逃避しようとする態度を生むことにもな

る。ちょうどこのころから、木戸は書画骨董に関心を寄せはじめており、その興味は維新後も生涯尽きることはなかった。政治の世界から風流の世界へ、木戸はしばしば逃避しなければならなかったのである。だが、ここではそれは、「弟、長之人にあらず、日本之人にあらす、天に登りて今日皇国を見る」という広汎かつ客観的な展望を可能にしている。つづけて彼は言う。「実に天も未皇国を御見捨は無之事にて、今日之場合に至り候も、自ら皇国之病ぶんり仕候に可有之歟。天下に名医有之候て、於子此天下安静、永久之基本も相立、皇国富国強兵之策も今日より被相施、天下共に安楽之場合にも可立至を奉存候得共、天にも名医の御人撰までは無之……長州今日之場合に立至りをを名医よりしてうかがわせ候はゝ、千歳一時之機会にも可有之歟。左候て、今日之長州も皇国之病を治し候にはよき道具と存申候。」[18] 木戸にとって自藩は、対外危機と国内分裂という「皇国之病」を治し、「皇国」全体の「富国強兵」化によって「天下」を「安楽」に至らしむべき「道具」にほかならないのである。高杉がみずから「狂」となり没我的に同化していった「正気」を、木戸は共有しつつも操作可能な距離を置いていたといえよう。また、「道具」ということは、その役割を果せばそれが不要になることをも意味しているのである。すでに木戸は、数年後に版籍奉還論の口火を切る中央政府官僚の目で自藩を見つめている。[19]

こうして木戸は、一方において藩権力のリーダーシップを掌握して「富国強兵」政策を推進しつつ、他方その強力な「道具」を駆使して、「皇国之病」にとりくむ「名医」たらんとする使命感に燃えていた。そして、その木戸の政治活動全体を貫き、それを導いた思想の根底を流れていたのは、前述の「條理」と呼ばれる思考法であった。「国家ノ事、癸丑以来自ラ條理アリ。」「多年ノ條理曲ル能ハザルモノアリ。」[20]「いずれ迄も條理と曲直は分明に相立置度」[21]という考えが、当時の木戸の主張の根幹をなしていた。すなわち、パワーポリティクスの観を呈した政治状況の渦中にあって、全国的統合への針路を求める木戸の念頭を占めたのは、眼前の政治状況に内在する方向性―「時勢之理」[22]を

見きわめるとともに、それをどう自らの目標へ導いていくかということであった。しかもその国内統合への過程がつねに「外圧」の脅威にさらされているという事情は、状況認識と政治方針とを内包するこの思考自体をいっそうラディカルな論争の場へと押し出したのである。すなわち「たとへ天幕之命と雖も、得と其源をたって、皇国之御為不條理之義には必随従致す間敷」[23]ことが同志と申し合わされ、「渠等（幕府）不條理中、従是は飽迄條理を立、苟も天下耳目ある人をして、漸々我藩御正義之御正義たる所を令知候儀、肝要之御事に奉存候。」[24]と幕府の「不條理」が攻撃された。ここにおいて、「條理」の論理は幕末慶応年間における政治的正当性の主張と結びつくに至るのである。

木戸において以上のごとき思想的展開が可能だったのは、とりわけ彼が藩権力を背景にしていたからである。いいかえれば、この時期には藩という権力基盤を持つ者のみが、主観的にも客観的にも、自己を政治主体として自覚しえたのである。とするならば、同じく藩権力のリーダーシップを掌握し、ダイナミックな状況の中で国内統合を模索する大久保や、彼と提携して幕末政局に積極的に働きかける坂本龍馬や岩倉具視（一八二五―八三）の政治思想の根底に、木戸と同様の展開が見られたとしても、たんなる偶然とはいえまい。

たとえば大久保においては、政治状況の変化に敏感に反応する彼の政治感覚が、次のごとき思考法へと結晶しているのが見られる。「只今之處、大変革之始、復古之大業成否之際ニ相関リ候機ニ御坐候得は、克々始終之見居被為立、事之利害得失、人心之向背去同を洞察し、永世不朽之治體、屹度相居り候儀肝要御坐候」[25]政治状況の洞察にもとづいて「始終之見居」を立て、朝廷による国内権力の統合という目標を追求するという、ここに見られる思考法は、木戸における「條理」のそれと、本質的に同一の構造をなしている。「始終之見居」を誤れば、したがって「天下之條理」[26]を確立することはできない。そしてその結果はたちどころに「天下之安危ニ相拘」るのである。大久保にとって、国内の分裂を拡大し諸外国の干渉をまねく幕府の第二次征長ほど「條理顛倒」[27]の「暴挙」はなかった。大久保にかぎら

ず、「條理」は幕末ことに慶応年間における流行語のごとく頻繁に用いられ、今日、諸藩であると幕府あるいは公卿であるとを問わず、各種文書にこの語を散見しうるのである。[28] かくて第二次征長は、幕府は「不條理」という澎湃たる批難の声を巻き起したのであるが、また他方において、幕末政治の末期に至って、幕末・維新のリーダーたちの間に右のような論理が共有されたということは、薩長連合を中軸とする倒幕・維新勢力形成の重要な思想史的背景をなしているといえよう。

たとえば一八六六年（慶応二）一月の薩長同盟、翌年六月の薩土盟約成立の思想的バックボーンであり、この二つの同盟によって形成された勢力の綱領ともいうべき「薩土盟約書」には、右にのべた当時の思想状況が反映している。坂本の起草になるこの「盟約書」は、土佐藩のリーダーである後藤象次郎、福岡孝弟、佐々木高行らの修正を経て、木戸、大久保により手写しされ、維新に至るまで彼らに文字どおり共有されていた。

「方今、皇国ノ務、国體制度ヲ糺正シ、萬国ニ臨テ不耻、是第一義トス。其要、王政復古、宇内之形勢ヲ参酌シ、天下後世ニ至テ猶其遺憾ナキノ大條理ヲ以テ處セン。国ニ二王ナシ家ニ二主ナシ、政権一君ニ帰ス、是其大條理。我皇家綿々一系萬古不易。然ニ古郡縣ノ政変シテ今封建ノ體ト成ル。大政遂ニ幕府ニ帰ス。上皇帝在ヲ不知、是ヲ地球上ニ考フルニ、其国體制度如茲者アラン歟。然則制度一新、政権朝ニ帰シ、諸侯会議人民共和、然後庶幾以テ萬国ニ臨テ不耻、是ヲ以テ、初テ我皇国ノ国體特立スル者ト云ヘシ。若、二三ノ事件ヲ執リ、喋々曲直ヲ抗論シ、朝幕諸侯俱ニ相辨難、枝葉ニ馳セ小條理ニ止ル、却テ皇国ノ大基本ヲ失ス、豈本志ナランヤ。爾後執心公平所見萬国ニ存ス。此大條理ヲ以テ、此大基本ヲ立ツ、今日堂々諸侯ノ責ノミ。成否顧ル所ニアラス、斃而後已ン。（以下略）[29]」

この「大條理」の思想が主張しているのは、次のような構造をもつイデオロギーである。第一に、今や中央集権こそ「地球上」普遍的な体制原理であり、「綿々一系万古不易」の皇室をもつわが国においても、天皇をナショナルな

シンボルとする中央集権体制をこそ本来の国家原理としなければならないとする見解である。そこでは天皇統治の原理を古代から当時に至るまでの政治社会発展のあるべきスジとして想定する歴史観が前提されている。第二に、現実にはそのスジからの逸脱が生じたのであり、封建制度の登場がその始点をなしている。そして徳川幕府の支配は、その逸脱の極点であると位置づけられたのである。このような論理によって、二百五十年の長きにわたり永久的な支配と映じた徳川幕藩体制を歴史的に相対化し、「将軍職ヲ以テ天下ノ萬機ヲ掌握スルノ理ナ」[30]きことが結論づけられ、「王政復古」が具体的なスローガンとして揚げられたのである。[31]

これ以後、倒幕から維新政権の樹立に至るまで、この目標の実現にむかって彼ら幕末のリーダーたちの政治的情熱とエネルギーのすべてが傾注され、彼らの政治権力への急速な接近が試みられるのであるが、[32]ここでは次にのべる彼らの間で交された二つの話題から、この激動期における彼らの思想の特徴を理解することにしよう。

一つは「老婆之理屈」というものであるが、これは木戸が英国公使館員アーネスト・サトウと会ったときに、サトウが語った言葉である。サトウは、近頃諸侯が上京していろいろ建言しているようだが、それらの内容はおそらく実行には移されまい。西洋では昔から、これこそすぐれた主張であると自負し、世間にも言いふらしながら、実行不可能となるとそのままに放置してしまうようなことを「老婆之理屈」と言って好まないものである。ところが現在この国の建言は、どうも「老婆之理屈」のような気がする、と木戸に語った。木戸はこれを聞いて、「不覚長歎息、外国(通)辨官をして此話を吐しむるは、列侯は不及申、神州男児之大耻辱と老屈生までも甚憾概悲痛罷居候」[33]と、そのような傾向が実際に存在することを認めるとともに、坂本に「何卒此度は終始脱兎」[33]の勢いを維持しつづけようと申し入れている。木戸がこの当時から武力行使の必要性を強調し、のちに戊辰戦争においても武力行使による革命の徹底を主張したのも、中途で妥協し「老婆之理屈」に終ることを恐れたためであろう。坂本もこの話を土佐藩の重役佐

々木高行に語り、佐々木が土佐藩論を倒幕へ向わせるように彼の奮起を促している。[34] このエピソードは、木戸や坂本が、革命のラディカルな遂行を目指していたことを物語っている。大久保がこの点において彼らにひけをとらなかったことはいうまでもあるまい。

もう一つは、彼らが革命の遂行を芝居にたとえていることである。「時に御内話相窺候上の方之芝居も近寄どもは不仕哉。何分にも此度之狂言は大舞台の基を相立候次第に付、是非とも甘く出かし不申而は不相済」[35]「是非とも芋（薩摩藩）と同挙動之趣向に決定仕、……必々後之幕はまた趣向も相立可申と存詰、手下しを内々仕置候……大に機会を得、ここをせんどゝ相さわぎ、始終一貫之處を以漸相決し」[36]「其期に先じ而甘く玉（天皇）を我方へ奉抱候御儀、千載之一大事に而、自然萬々一も彼手に被奪候而は、たとへいか様之覚悟仕候とも、現場之處四方志士壮士之心も乱れ、芝居大崩れと相成、三藩之滅亡は不及申、終に皇国は徳賊之有と相成、再不可復之形勢に立至り候儀は、鏡に照すよりも明了に御座候。」[37] 坂本は、この「芝居」という表現を「名言」と評し、[38] 大久保もそれとは別に、政局を芝居になぞらえている。彼らが政治を芝居にたとえることを好んだのは、現実政治の場における主体的決断と客観的状況認識との間の往復、緊張関係が、あたかも狂言のスジ書きをしながら自らその役を演技する役者の心境を思わせからであろう。だがまた、過熱した政治状況の中にありながら、その政治状況の展開を芝居に置きかえているところに、彼らの客観的な認識にもとづいた予測——政治的リアリズムの成熟を見ることができよう。

以上二つのエピソードに、革命の成就にかける政治的情熱と政治的リアリズムという、本来両立しがたいこの二つの要素が、幕末のリーダーたちにおいて成熟した結合をなしているのを知ることができるのである。

（1）但馬では広江孝助と称し荒物商を営み、失意の冬をはさんで九カ月を過している。「今さらべつに申事もなく、野にたをれ山にたをれてもさら〳〵ざんねんはこれなく、たゞたゞ雪きのきゆるを見てもうらやましく、ともにきへたきこゝち致し申候。」（「広戸直蔵宛書翰」『木戸

孝允文書』二、五六頁）という、出石の知人へ宛てた手紙の中の、言葉や、その頃詠んだ「おもふほどおもひがひなきうきよかな」（「広戸甚助宛書翰」同上、二、五五頁）という一句に、当時の木戸の心境がうかがわれる。

(2) 高杉は一八五九年（安政六）頃から、実学の必要性を認識し、「学文面目を大いに変じ」、「経済」「兵制」（「久坂宛書翰」福本前掲書、五八七頁）「軍艦の乗り方、天文地理の術に志し」（「久坂宛書翰」『高杉晋作全集』上、一四三頁）ていた。兵制などの学習を深めるにつれ、彼は実際上の有効性（「実理」「実用の理」―同上、下、三三三―六頁）につよい関心を抱くようになっていった。「内は誠心誠意の工夫より以って、外航海砲術器械等に到り、盡く其の至理を研窮せざれば則ち天下を治む能わざるなり、一家を斉う能わざるなり。航海砲術の理を窮む能わずば、則ち誠心誠意の工夫の至らざる所以也。」（「日記」同上、二一二頁）高杉のこのような思考法と、前章で見た久坂のそれとを比較すれば、高杉が久坂らの運動と袂別していったことも当然といえるだろう。

(3) 「大田市之進他七人宛書翰」同右、上、三八二頁

(4) 「某宛書翰」同右、上、三七三頁

(5) 「回復私議」同右、下、三六二頁

(6) 「僕一身のところは何時も暴発すべし。しかれども国家（長州藩）の儀は、ぜひ共割拠にあらざれば萬全の策とは考えず。」（「日記」同右、下、二五五頁

(7) 「山県狂介宛書翰」同右、上、四九四頁

(8) 「回復私議」同右、下、三六二頁

一八六四年（元治元）野山獄中の高杉は、彼独特の内面修養への傾向をともないながらも、かつての「正気」論に依拠した志士時代の活動が実際には、合理的思考の働きを減退させる悲憤慷慨―「不毛の興奮」（ジンメル）と政治活動の結果にたいする責任感の欠如に支配されていたことへの反省をこめて当時を回顧している。

「東山の月、墨水の花、書剣飄然四方に周遊す。東に交りを常奥の士と結び、西は土肥の士と死を誓う。みずからもって報国の基を立つるをもって足れりとなす。その相会するや、山堂水閣にあらざればすなわち酒樓茶店。肝胆を吐露して天下の事を談ず。興来たれば杯を呼び、悲歌大酌、千金を擲つこと糞土のごとし。都城を見て広しとなさず、放吟の声絃歌とともに相和す。……初め相会するや廟議の失策を慨し、天下の義士なきを患う。憤激して誓をなし、一死もって皇国の正気を維持せんと欲す。その心すなわちおもえらく、われ死をもって国に報ずれば明日の生必ずしも可ならず。何ぞ因循惜命の士に倣わんや。将来の計のためか、何ぞ区区縄墨を守り、しこうして擬君子の所為を為さんや。縦之今日詩酒放蕩の謗あらしむるも、明日一死もって天下を動かせば、すなわちその大志誠忠また天地に分明なり。しこうしてあえてもって一点の疑惑を胸間に置かんや。

予、獄に下り来たって終日閑坐し、たまたま朝に道を聞けば夕に死すとも可なりの語を得たり。愛玩熟味して日をもって夜に継ぐ。一旦闥然として旧夢消滅す。すなわち昔日の愉快と称するゆえんは浮気虚喝にして、真に心の愉快となすゆえんにあらず。……一時の浮気虚喝は、すなわち一日の過、一日の過はすなわち一日の過にあらずして、終に終身の累をなす。況んやその一日にあらざるをや。」（「六月朔旦・幽室記」同右、下、三四七―八頁）

(9) 「何れ之筋、此世体は如何ニ変遷も難測事候故、御国元堅固ならすしては相済不申候間、今一層確実いたし、御趣意十分ニ被為行届候様奉至願候」（「島津求馬宛書翰」『大久保利通文書』史籍協会叢書、東京大学出版会、一九六八年、一、一九一頁）
久光上京の際に生じた寺田屋事件で、久光は大久保がかつて精忠組の同志として盟約を誓った有馬新七ら薩摩藩尊攘激派を殺害し、真木和泉らの挙兵計画を頓挫せしめたが、それに大久保が加担したことは、大久保が割拠論へ決定的に傾いたがゆえであり、同時に大久保と尊攘激派との悲劇的な袂別となった。

(10) 「石垣鋭之助・上野良太郎宛書翰」『大久保利通文書』一、二九八―九頁

(11) 「山田宇右衛門宛書翰」『松菊木戸公伝』上、五八五頁

(12) 「大島友之允宛書翰」『木戸孝允文書』二、二九〇頁　ここでは、中央集権体制が藩のみならず「天下」においても積極的に肯定されていることが注目されよう。

(13) 「大田市之進宛書翰」同右、二、六四頁

(14) 「高杉晋作宛書翰」同右、二、一五四―五頁

(15) 当時、幕府はじめ諸藩の、軍事的・経済的にみて圧倒的に優勢な包囲に遭い、自藩滅亡の危機に瀕していた長州藩内に、起死回生のエネルギーの湧出を期待しうるこの「正気」論が受け入れられる素地があったことは容易に想像しえよう。
同時に木戸は、集団にとって外部からの危機は内部の結束をもたらすという、政治の一般的法則をこのとき会得した。木戸が明治初年にいち早く征韓論を主張したのは、長州藩におけるこの教訓を適用しようとしたと考えられる。彼は次のように語っている。「世の中と申ものは、さて〳〵あじなものに而、何歟眼前に艱難有之候得は、何事も運ひ易く、人も云事をきゝ申候。少しく眼前安く相成候と、萬事至て手重く相成、玉も石も同じ重なりと申見識有之、辺り申候。」「河瀬安四郎宛書翰」『木戸孝允文書』二、三一一頁

(16) 「回復私議」『高杉晋作全集』下、三五八頁

(17) 「岩下左次衛門、吉井幸輔宛書翰」『坂本龍馬関係文書』史籍協会叢書、東京大学出版会、一九六七年、一、二四〇頁

(18) 「大島友之允宛書翰」『木戸孝允文書』二、九〇頁　大島は対馬藩士であり、他藩士である彼にたいしてだからこそ、木戸はこのように大胆な構想を吐露したのであろう。

(19) たとえば品川弥二郎にあてた次の書面には、木戸の目がつまるところ朝廷の権力の浮沈に注がれ、彼においてはそれが藩よりも価値的に優先していたことが知られる。「今日の事、実に天朝之御微力を奉歎候外無之、長州之滅するよりも必長州滅したる後の天朝思ひ遣られ申候。」(『木戸孝允文書』二、二三一頁)

(20) 「嘉永文久年間の自叙」『木戸孝允遺文集』一六八頁

(21) 「品川弥二郎宛書翰」『木戸孝允文書』二、一七三頁

(22) 「大島友之允宛書翰」同右、二、九一頁

(23) 「品川弥二郎宛書翰」同右、二七五頁

(24) 「小田村素太郎宛書翰」同右、二、一六八頁

(25) 「桂右衛門宛書翰」『大久保利通文書』一、一二一—二頁

(26) 「西郷吉之助宛書翰」『大久保利通文書』一、三五四頁

(27) 「討幕の宣旨降下を請ふ趣意書」同右、二、一四頁

(28) ここに幕府支配の秩序観の決定的な崩壊と、それにかわって各勢力が自己の政治的正当性を主張するという一般的な現象がみられる。その背景に、「天下は一人之天下に無之候。微力といへども傍観も相成間敷、勅命朝に下り夕に変ずるは皇国之習」(木戸孝允宛・北垣道書翰、『坂本龍馬関係文書』、一、一五八頁所収)という、広汎な政治主体の覚醒とアナーキーな状況認識があったことはいうまでもない。

(29) 『松菊木戸公伝』上、七九四頁。なお『坂本龍馬関係文書』一、三一〇頁、『大久保利通文書』一、四八〇頁参照

(30) 『松菊木戸公伝』上、七九五頁

(31) この復古主義に現われた幕政批判の論理は、およそ一世紀前に山県大弐の著書『柳子新論』のそれと同一構造をなしている。ナジタ氏(Tetsuo Najita)は、同書に展開されている復古主義の特徴が次の三点にあるとしている。(1)古代にまでさかのぼる、日本の一貫した歴史への信念。(2)近い過去(recent past)の歴史的展開が無条件に肯定されるべきではなく、たとえば歴史上のある時点は、事態の悪化の開始を論理的に説明するときに引き合いに出される。つまり一貫した歴史は、必ずしも歴史の完全な展開を意味するものではない。(3)悪しき方向への歴史の展開は、理論的に修正され本来の軌道に引きもどされうる。悪しき歴史は、人間生活にとって必然的な運命なのではない。(Tetsuo Najita, "Restorationism in the Political Thought of Yomagata Daini (1725—65)", The Journal of Asian Studies, Vol. 31. No. 1. Nov. 1971)

岩倉具視の先祖は、大弐の同志である竹内式部の宝暦事件に連座しているが、その岩倉が一八六七年(慶応三)十月に朝廷へ提出した意見書(「王政復古議」、『岩倉具視文書』史籍協会叢書、東京大学出版会、一九六七年、一、三〇一—二頁参照)にも、右と思想構造を同じくする

復古主義がみられる。その正当性を、岩倉もまた「大條理」と表現しているが、このことは岩倉と大久保や坂本らとの思想交流の結果であろう。

(32) 木戸は英国留学中の同藩士に、当時の状況と自らの決意を述べている。「何れの道、今日之形勢に而は、不日一大変に必立至り不申而は、萬々相済間敷と被考申候。就而は、皇国之大名分、大條理より論じ起し、国に二王なき之大義を以、萬国に渉り不可耻之基相立度と奉存候。」(「河瀬安四郎宛書翰」『木戸孝允文書』二、三〇九頁

(33) 「坂本龍馬宛書翰」同右、二、三〇七—八頁

(34) 『坂本龍馬関係文書』一、三四七—八頁

(35) 「坂本龍馬宛書翰」『木戸孝允文書』二、三一四—五頁

(36) 「井上馨・伊藤博文宛書翰」同右、三二九頁

(37) 「品川弥二郎宛書翰」同右、三三八頁

(38) 『坂本龍馬関係文書』一、三〇一頁